
セカイの欠片

莓椛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイの欠片

【Nコード】

N6846Q

【作者名】

葛城

【あらすじ】

あなたは何を望むのか。

その望みはセカイを変化させる。

それがたとえ、———どんなセカイであつても。

———さあ、私にあなたの望むセカイを見せてもらなさい。

話を少し変えました。

はじまり

…あなたは何を望むのか。

その望みによって、セカイは変化する。

——変化させることができる。

どれだけ変化させることができるかは——あなた次第。

それがたとえ、どのようなセカイであっても。

——どんなに滑稽で、醜くて、浅ましくても。

さあ、望みなさい。

さあ、願いなさい。

そして、私にあなたの望むセカイを見せてもらいなさい。

——私はそのセカイを見て嘲笑ってあげる。

それとも——私と一緒にセカイを覗いてみる？

第1章 不変 *憂鬱*

空が青く広がり、この小さな島を今日も優しい色で包み込んでいた。

その中で少女たちは、挨拶を交わし合う。

「おはよう!」

この明るい声の持ち主は、麻梨菜と呼ばれる少女。

この声を受け止める少女の名は、由夏。

二人は幼い頃の付き合いであり、もう十年以上も同じ時を過ごして来た。

しかし、少女らの性格は対象的であった。

由夏は控え目な性格であり、麻梨菜は誰に対しても明るく気さくな性格であった。

そして、この小さな島の小さな町ではほとんど人が顔見知りであるが、由夏は数人を除いては一線を引いて関わりを保っていた。

他人の心に大きく踏み込むこともなければ、他人に自分の心に大きく踏み込ませることはしない。

こういう性格が手伝い、彼女は人に過大に好かれることも嫌われることはなかった。

こんな彼女にも想い人がいるのだが、彼女は何も行動に移すことが出来なかった。

「…か、由夏、麻梨菜の話聞いてた？」

「う、ごめん。なに？」

彼女はどうかやら意識が別の世界に行ってしまったていたらしく、麻梨菜の声が全く耳に入ってなかったようである。

「…もう。もうすぐ体育祭だねっていう話」

体育祭と言言葉に、由夏は顔を歪めた。

今まで忘却の彼方にあつた、嫌なことを思い出したからである。
実際、もうすぐ体育祭があるのだが、彼女にとっては『恥さらし祭』
という別の名を持つほど嫌なものなのである。

正直、何もしたくない。

何も出たくない。

そう、由夏は思っていた。

それは、現実には叶わぬ願いなのだが。

「嫌なこと思い出させないで…」

「由夏は運動苦手だもんねえ」

そついう、麻梨菜は運動が得意である。

おまけに、陸上部でもあった。

足は速いことは言うまでもない。

足は速くとも、なぜか球技は苦手とかいう人もいるが、そついう部類ではなく球技も得意である。

では、水泳は苦手なのか―そついうわけでもなく、水泳も得意だった。

つまり、簡潔に言えばスポーツに関しては万能なのだ。

それに対し由夏は、普通並に出来る競技もあるにはあるが、それも得意とまではいかないうえに、どれも体育祭には関係が無い物だ。

さらに悪いことに、体育祭に関係ある競技はほとんど苦手なのであ

る。

「麻梨菜は出来すぎるよ……」

「そんなことないよあ？」

「そんなことあるよ……。私も麻梨菜みたいに運動できたら、体育祭楽しいんだろうな……」

「運動できなくても、楽しんだらいいと思うなあ。応援とかあ」

由夏は、そういう風に良い方に考えることが出来る麻梨菜が正直、羨ましいと思った。

そんな風に考えられるようになればいい、と。

しかし、由夏は基本的にネガティブ思考なのである。

この性格を治さない限り、無理な話であろうことを自覚していた。

そしてまた、憂鬱な季節が来る。

空は青く澄んで綺麗だ。

こんなに綺麗な空なのに、自分を憂鬱にさせる。

この綺麗な空を見るだけの季節なら、どんなに良かっただろう。
由夏から、ため息が一つ零れ落ちた。

とうとう体育祭の競技を決める時がやって来てしまった。

できれば、やって来ては欲しくなかったのだが。

しかも人数が少ないので、一人につき三種目以上は当たり前なのである。

多い人になると六種目を超える人もいる。

私はできる限り、地味な競技に出ようと心に決めた。

とりあえず、玉入れは確保したいところだ。

「はい、次は玉入れ。出たい人は手を挙げてー」

私は迷わず手を挙げた。

そして、あっさりと玉入れに出ることは決定した。

玉入れは、格別人気のあるものではないからだ。

問題は残りの競技は何に出るかである。

リレーはもちろん除外だ。

二人三脚にも出たくない。

借り物競走も出来る限りは遠慮したい。

しかし、他に道がなければもう借り物競争でも良いだろう。

私が何に出ようかと真剣に思案していると、何を勘違いしたのか隣の席の男子が声を発した。

「委員長、渡里さんが二人三脚に出たいそうですー」

その言葉が、私の頭の中に鋭く入り込んだ。

そして、私は大きく目を見開いた。

しかし、なかなかそれを理解することができなかった。

すっぱりお腹を斬られた魚が、その事実気付かず、何事もなかったように再び泳ぎ出すのと同じような気分だ。

…つまり、衝撃すぎてそれが現実だとは受け止められないでいたということだ。

私が茫然としている間にも、すらすらと白いチョークで私の名前が

黒板に書かれていく。

「渡里さんって、いつも遠慮して、リレーとか二人三脚とかそういう系でないよね。控え目なのはいいけど、たまにはちゃんと自分が出たい種目を主張しなきゃ損だと思うよ。せつかくの体育祭なのにさつきも、二人三脚の時すぐ出たそうにしてたのに、手挙げなかったし」

その男子はまだ喋っていたが、私の頭にはその言葉たちが響くことはなかった。

とりあえず一つだけはつきりと理解したことは、今年の体育祭は別の意味で終わってしまったということだ。

その事実だけが、ずっしりと漬物石並の重量感で私の心に押し掛かってくるのだった。

——放課後。

五月に入っただので冬よりは日は長いが、まだそこまで日は長くはない。

グラウンドはうつすらとオレンジ色に染まっている。

そのグラウンドに不本意ながら、私は影を落として立っていた。

その理由は——体育祭の練習である。

中学生になってからは、小学生の頃よりは断然、練習時間は短くなっている。

小学生の時は毎日毎日飽きもせず、練習させられた。それも長時間である。

それよりは中学生になってからの練習は軽いものなのだが、なんせ今年は競技が宜しくない。

玉入れはともかく、二人三脚はかなりの練習が必要であろう。

ろくに練習もせず本番を迎えてしまったら…悲惨な運命が待ち構えているのは目に見えている。

もちろん、練習も悲惨なのだろうが、本番で少しでもマシになれば良い。

できれば、全校生徒の前で醜態をさらしたくない。

「二人三脚の人集まってー」

仕切っているのは、私をこんな状態に陥れたあの男子である。

「二人一組で練習してねー」

組み合わせは事前にくじ引きで決めた。

この組み合わせだけがこの練習での、私の唯一の楽しみだった。

「渡里、練習しよう」

「あ、うん…」

私は二人三脚に気乗りしない気持ちと、緊張した気持ちの混ざった返事を返した。

なぜなら二人三脚自体は嫌だが、その相手は自分の想い人なのだ。

「足出して」

私は素直に足を出した。

器用にはちまきで水沢君は私の足と自分の足を結んでいく。

「じゃあ俺は左足、渡里は右足からな。せーのって言うから、その時前に足出して」

私はその言葉に頷いた。

「せーのっ」

その言葉と同時に私は右足を出したつもりだったのだが、どうやら少し遅かったようで、私は引つ張られる形で足を出してしまい、上手くバランスを保つことが出来なかった。

そのまま、一人地面に激突した。

「だ、大丈夫か…？」

「……………うん」

地面から顔を離して、私は返事を返した。

水沢君は私に引きずられて転けることなく、しっかりと地面に足をつけて立っていた。

流石は運動部だ。

私はなんとか立ち上がったのだが、少しだけ膝が痛む。

「保健室行くか？」

「大丈夫…。後で行くから…。とりあえず、練習しよう？」

私がこう言ったのはもちろん体育祭の練習に燃えているからではない。

迷惑をかけるのは嫌だったからだ。

私のその言葉で練習は再開されたのだが、その後も……悲惨だった。

足を出すタイミングが、何度やっても合わない。

そのおかげで、何度も転んだ。

一人で転ぶ場合が多かったが、たまに水沢君も巻き込んでしまった。それが申し訳なく、心苦しかった。

結局、この日はタイミングを合わせることが出来ず、練習は終了してしまった。

最悪である。

「渡里、保健室に行こう」

「えっ… 一人で行けるから大丈夫」

練習が終わってから、水沢君は優しい言葉を掛けてくれたのだが、こういうことに慣れていない私は断った。

「いいから行こう。俺も保健室に行くから」

その有無を言わせない声に思わず頷いてしまった。

次の日、私は重たい体を引きずるようにしてベットから這い降りた。体のあちこちが悲鳴をあげていた。

階段を下りるにもおかしい恰好になりながら下りる。

家の階段でさえ、この有様なのだ。

ましてや学校の階段なんて、今の私には山の山頂まで登る気分であ

る。

しかし、なんとか三階まで辿り着くことができた。

教室に入り、自分の席に座って落ち着いた。

座っても体は怠いし、痛みは続く。

「渡里さん」

隣の男子が話し掛けてきた。

「…なに？」

気怠いせいかもしれないより低めの声が出てしまう。

気怠いせいだけではないかもしれないが。

「渡里さんって、もしかして今まで嫌でリレーとか二人三脚とかに出てなかったの？」

その質問に体から力が抜けた。
ついでに、魂も抜けた気がする。

もう少し早く気付いてくれれば、こんな悲劇など起きはしなかったのだが。

いうより、なぜそんな勘違いをしていたのかを聞きたいくらいだ。

「うん…」

「ごめん…。僕が勘違いしたばかりに…。昨日の練習見て、もしかして運動苦手なのかなって思って…」

「うん…」

私は脱力していたので、全部適当に頷く。

体育祭なんて嫌なもの、早く終わってしまえばいい。

そしてこの日、私にはダンスの才能もないことが発覚してしまった。

三年生は毎年フォークダンスをやるのだが、なんせ人数が少ないため2年生も半分以上が参加させられる。

私もその参加させられ一人で、練習をさせられていた。

一曲目はなんとか踊れていたのだが、二曲目が酷かった。

左足を上げなければならぬところをなぜか右足を上げてしまうの

だ。

自然な流れでいけば、絶対に左足が上がるはずなのだ。

しかし何回やっても間違ってしまう。

揚げ句の果てに、先生との個人レッスンが始まってしまった。

周りからは笑いが起きる始末…。

曲が流れて男子と踊り始めても先生が後ろから声を飛ばしてくる。

その内容に笑ってしまい、もはや私はダンスなどできない状態に陥った。

男子からは苦笑いされ、女子には笑われ、先生には突っ込みを入れられ、とにかく一言で言えば散々な時間だったのだ。

唯一の救いは、この時間水沢君と踊ることがなかったことだろうか。

あんな姿を見られていたら、もはやしばらく立ち直れないだろう。

「由夏」

後ろからした声に振り向いた。

「なに？」

「さっきのダンスおもしろかったよお」

麻梨菜は笑いながら言った。

失礼な親友である。

私はあれでも必死だったのだ。

「おもしろくなんてないよ。私は散々だったんだよ？」

私と麻梨菜は…主に私が麻梨菜に反抗しながら、教室まで戻った。

*** 勇気 ***

体育祭まで続く放課後の練習に、だんだん私は幸せを感じていくようになった。

今まで何も接点のなかった水沢君と話せる機会や、接触する機会が多くなったからだ。

本当に今まで話す機会など皆無だった私には、放課後の短い時間が重要な意味を持つようになったのだ。

少しでも多くの時間を彼と過ごしたかった。

短い会話でも、話せることが単純に嬉しかった。

しかし、運動面的には多大な迷惑を与えてしまっているのです、すこく申し訳ない気持ちになってしまふのだが。

そんな放課後の練習を繰り返す日々を送るうちに、体育祭当日を迎えた。

生憎の天気だった。：私にとっては。

綺麗な青空が私に微笑みかけた。

私はそれに顔を歪まして答えた。

今年の体育祭は、二重苦だった。

一つ目は、純粹に体育祭の競技に出て、恥を晒したくないということ。

二つ目は、もちろん水沢君のことだ。

体育祭が終わり二人三脚の練習がなければ、同じクラスとはいえ、話す機会など無いに等しい。

つまりこの体育祭が終わってしまえば、私と水沢君との接点は失われてしまうのだ。

それが、嫌なのだ。

しかし、今日で体育祭は終わる。

仕方なく、私は学校にとぼとぼと重い足どりで向かっていくのだった。

学校に着くとまず最初はテント張り。

その後は開会式にラジオ体操。

…そしてその後は——二人三脚。

競技的には早く終わらせれるのは良いのだが、水沢君との最後の二人三脚だと思ふとこんなに早く終わってほしくないと思う。

しかし、二人三脚は待ってくれない。

集合の放送がかかり、私は洪々集合場所に向かった。

水沢君はどうやら先に来ていたようだ。
私は彼に駆け寄る。

「お…おはよ」

珍しく自分から挨拶を試みた。

「おはよう」

「緊張するね…」

「そうだな…」

…会話が続かない。
気まずい雰囲気になり、落ち着かない。

「あ、あの…」

私が言い淀んでいるうちに、第一走者のスタートの合図が鳴り響いた。
いよいよ、二人三脚が始まったのである。

そして、あっという間に自分たちの番がやってくる。
水沢君がはちまきで足をいつもの結んでくれる。

これが、最後の二人三脚になる。

最初で失敗しないか不安に襲われた。

しかし、そんな不安を裏切るように快調なスタートを切ることができた。

心なしかいつもより早く走れている気もする。

ゴールも目の前に見えてきた。そして見事に一着でゴールした。

…その瞬間、こけた。

最後まで気を抜くなという言葉が、頭を駆け抜けた。

結局無様な姿を晒すことになった。

体育祭の嫌な思い出がまた増えてしまった…。

保健の先生に手当てしてもらった後にグラウンドに戻ると、ちょうど借り物競争が始まったところだった。

それぞれ引いたカードを手に借り物を必死に探している。
すんなり見つかる人もいれば、なかなか見つからず行ったり来たりしてる人もいる。

ぼんやりと借り物競争を見てみると、麻梨菜が出ていた。
しかし、意外なことに最後にゴールしたみたいだ。

麻梨菜の駿足は、どうやら運には勝てなかったらしい。

…お題は猫だった。

誰だ。

こんなお題を書いたのは。

そして赤組の優勢で午前の部は終了した。ちなみに私は白組である。

午後の部の最初はフォークダンスである。

大いに不安であるが、しかし同時に期待もした。

水沢君もフォークダンスの参加者だからだ。

もしかしたら、踊ることが出来るかもしれない。

私が不安に感じていた踊りの方は意外に踊ることが出来た。

しかも前半に、運の良いことに水沢君と踊ることが出来た。

心拍数が異常に上がったのを感じた。

しかも緊張して、無駄に手汗をかいてしまった。

汗かきな女と思われるしまったかもとと思うと少し悲しかった。

それでも、手を繋いで踊れたので嬉しい。

後半は疲れてきたせいか、それとも楽しみが無くなったせいか、たぶん両方が原因だろう。

だんだん顔の表情は乏しくなってきた。

後、踊ることに必死になりすぎて水沢君以外、誰と踊ったかさ覚えていなかった。

午後は自分に関係のない種目がほとんどだったので、あっという間に過ぎた。

そして閉会式を迎え、得点などが発表された。

赤組の勝利だった。

私は体育祭に関して、勝ち負けはあんまり気にしないので、どうでも良かった。

どうしても良くないのは水沢君のことだった。

失恋するのを覚悟で、告白してしまおうかどうか、迷っていた。

迷った末に、私は告白することを決めた。

私から生まれた考えだとは思えなかったが、それほど体育祭の練習の時間が魅力的だったということだ。

また、喋ることも出来ない状態は嫌だったのだ。

これは、大袈裟でもなんでもなく、一世一代の覚悟だ。

「水沢君」

教室に帰る途中の水沢君を呼び止めた。
ちょうど、一人だった。

「なに？」

「あ、あの…」

次の言葉が出てこない。

たった二文字の言葉なのに。

やっぱり、やめてしまおうかと思った。

でも、言わずに後悔するのも嫌だ。

私は勇気を振り絞り、言葉を放った。

「好きです！付き合ってください！」

「いいけど」

随分、あっさりした答えだった。

* 幸福 *

告白への智也のあのあっさりした返事に、最初は戸惑った。

本当に承諾の返事だったのだろうか。

それとも、別の話と勘違いしているのではないか。

挙げたらきりがなが、私はずっとそんな不安でいっぱいであった。

しかし、だんだん不安を感じなくなり、私が智也と付き合ってから一ヶ月経ち、もうすぐ夏休みを迎えようとしていた。

特に部活にも入っていない私は夏休みはほとんど予定がない。

予定があるのは登校日くらいだ。

対して智也は、サッカー部に入っているので夏休みも毎日忙しく、なかなか会えそうもない。

そんなことを考えながら、いつものように学校で宿題をし、智也の部活が終わるのを待っていた。

智也が部活終わる頃になっても、まだ空は明るい。

そうつところに、季節の流れを感じる。

そろそろ智也が教室に来るだろうと、私は片付けを始めた。

すると教室のドアが勢いよく開け放たれる。

智也だった。

「待たせて悪い…」

「大丈夫」

少し息を切らせて言う智也に、私は笑いかけながらそう言う。

こういうところが、なんか可愛いと思う。

男子に可愛いという感情を抱くのはどうかとは思っが。

「じゃあ、帰ろうか」

私はそう言つと鞆を机から持ち上げた。

すると、智也はこちらに手を差し出して来た。

無言で、である。

こういうところが、本当に可愛いくて優しいと思いながら私は智也に鞆を預けた。

穏やかな日々を送りながら、あつという間に私は夏休みを迎えた。

なんだかんだで智也とはほぼ毎日会っている。

…ほんのちよつとの時間ではあるのだが。

練習が終わった後、少しだけ智也が私の家に寄ってくれるのだ。

それが、とても嬉しく感じる。

私が智也の練習や試合を見に行ったり、たまの休みには二人で出掛けたりすることもあるが、それ以外はほとんど私の家に智也は来てくれる。

後は、私は麻梨菜と出掛けたりとかもしている。

とりあえず、毎日が充実していた。

こんな充実した夏休みは初めてかもしれない。

今日は智也の練習試合を見に行くことになっている。

今日の練習試合は内の学校でだ。

智也への差し入れを用意し、私は学校に向かった。

日光がじりじりと肌を焼く。

正に夏真っ盛りだ。

コンクリートで塗り固められた地面より断然、土の地面の方が涼しいとはいえ、夏はやはり暑い。

木が多い分、少しは和らげてくれてはいるが。

…しかし、気分的に木々の間を通る度に響き渡る蝉の鳴き声のせいで暑さが増している気もする。

とりあえず鳴き声が可愛いらしいものじゃないのだ。
上から左右から私の耳を攻め立てる。
それがすごくうんざりした気分させる。

「由夏」

「あつ、麻梨菜」

向こうから走って来たのは、麻梨菜だった。

どうやら陸上部の練習のようだ。
ユニホーム姿が様になっている。

「どうして学校にいるの？」

「今日、練習試合なの」

誰の、とも言わずとも察したようで、そっかあと麻梨菜は言った。

「たまには麻梨菜の応援にも来てよねえ」

笑いながら、麻梨菜は続けて言った。

私も笑顔で、うんと頷く。

「じゃあ、麻梨菜まだ練習あるからまたねえ」

麻梨菜は来た時と同じようにグラウンドに走って行った。

グラウンドに着くと、ちょうどサッカー部の練習試合が始まろうとしている時だった。

智也はどうやらスタメンらしく、グラウンドの真ん中にいる。こちらには気付かない。

私はそつと地面に腰を下ろした。

試合が始まり、前半が終わった時点ではうちの学校が一点差で負けていた。

しかし、後半では何とか一点を返した。

その後は両者が一步も引かず、結局引き分けとなってしまった。

試合中に気になったのが、うちの学校の女子が智也のことを愛称で呼んでいたことだ。

たいしたことないことなのだろうが、すごく気になってしまった。

自分以外の女子が智也と親しくしているだけで、胸が苦しくなる。いつの間にこんなに好きになったのだろうか。

とりあえず私は智也に差し入れをしに、グラウンドに下りた。

「お疲れ様」

「…ありがとう」

「かつこよかったよ」

私が笑顔でそう言うと、智也は顔を真っ赤にした。
そのまま、俯いてしまった。

そんな仕種が可愛くて、私は思わず頭を撫でた。

「これ差し入れ…良かったら食べて」

その状態のまま、差し入れを差し出した。

「…」

無言のまま、智也はそれを受け取る。どうやらまだ照れているらしい。

「終わったら一緒に帰ろう?。」

無言のまま頷く。

「じゃあ、向こうで待ってるね」

私はそう言ってグラウンドの隅に移動した。

しばらくすると、智也が来たので二人で帰った。

「…日曜、練習休みなんだ。どこか行かないか?。」

「うん!。」

私は迷わず返事をした。

しかし、ふと思い付き以前から考えていたことを言った。

「あっ!どこか行くより私の家に来てもらってというのは駄目かな?。」

ちょうどその日は、普段は家にいる母と妹も出かけて、昼間は誰もいない。

「いや…いいけど」

「じゃあ、そうしよう!」

実は私の家でしたいことがあったのだ。

とりあえず、日曜日が待ち遠しくて仕方がない。
早く日曜日が来てほしい。

「あ…。そういえば、今日うちの学校の女子も応援してたよね？仲良いの…?」

「…いや」

「…そうなんだ?」

「…どうかしたのか?」

「あ…何でもないよ」

「そうか…？」

智也が言うのだから、本当のことなのだろう。

しかし、それでも嫉妬しまう私のこの感情を知られなくなかった。
些細なことで嫉妬しまう自分が醜くて嫌だった。

だから今は…このたわいのない会話に幸せを感じたい。
確実に今の智也は私だけを見ているから。

待ちに待った日曜日がやって来た。

私はこの日のために材料を買って用意していた。

…何の材料かというと、クレープである。

何を隠そう実は智也は甘い物好きなのだ。

顔からはあまり想像出来ず、意外だったのだが。

そして私も甘い物好きなのだ。

だから私はこの日のためにクレープの練習をしてきた。

…なぜクレープなのか。

単に私が食べたかったのである。

「どうかな…？」

私は恐る恐る尋ねてみた。

まずいと言われたら立ち直れないかもしれない。

「おいしい…」

そう言った智也の顔は幸せそうに笑っていた。

本当に美味しいみたいだ。

一安心した。

私もクレープを食べ始めた。

確かに美味しい。

まあ、クレープは作るのそんなに難しいものではないので、あまり喜べないが…とりあえず成功したという事実には満足だった。

「智也が喜んでくれて良かった…」

「由夏が作ってくれたのに、喜ばないはずがない…」

その言葉がすごく嬉しく感じられた。

こんな時間がずっと続けばいい。
そう切実に願った。

第2章 異変 *爪痕*

夏休みも終わり、文化祭を迎えた。

私は部活での出し物や部活がないので、クラスの準備を主にしていた。

なのでいつもより遅くなってしまう、早足で下駄箱に向かった。

智也と外で待ち合わせしているからだ。

下駄箱をあけると、一枚の紙が入っていた。

それにはただ一言、死ね！と赤い文字で書かれていた。
赤い文字というのは、その書かれた言葉の意味を増長させる。

そして、これを誰が書いたのかわからない。

こういうことされる覚えもないし、されたこともない。
勿論したこともない。

だが、確実にこの赤い文字は私への悪意の現れだった。

理由は分からないがこういった悪意を向けられたという、ただこの
事実是我の心に深く突き刺さった。

下駄箱から離れ、外に向かうと智也が待っていた。

「遅くなってごめんね！」

私は慌てて駆け寄った。

「今来たところだから大丈夫……」

私は智也を見て安心して泣きそうだった。

あの文字に、自分の心は傷つけられていた。

そっと智也の手を握った。

「どうかしたのか……？」

私のいつもと様子が違うことに気づき、心配そうに声を掛ける。

「何でもない……」

私はそう一言返すのが精一杯だった。
泣きそうだったから。

ただ、死ね！と書かれただけで大袈裟かもしれないが、私の心は本当にまいってしまっていたのだ。

智也は私の頭を手を繋いでいる方とは反対側の手でそつと撫で始めた。

その智也の優しさが、心に染みだ。

限界だった。

とめどなく涙は溢れ始めた。

「何かあったのか？」

しかし、私はその質問に答えることは出来なかった。

泣いていたから、ということもあったのだが、何よりこのことを智也に知られたくなかった。

智也もそれ以上何も言わずにただ傍にいてくれた。

私たちはそのまま無言で帰り道をひたすら進んだ。

家に帰宅するとすぐに麻梨菜に相談しようと思い、受話器を握った。番号を押すとすぐに呼び出し音が鳴り、まもなくして運よく麻梨菜が出た。

「はい、もしもし。高瀬ですが」

「麻梨菜…？私、由夏…」

「由夏あ？どうしたの？」

私は麻梨菜にあの紙のことを話した。

「水沢君には相談しないの？」

麻梨菜にしては珍しく語尾が伸びていない。

「うん…知られたくない」

「どうして？」

「心配かけたくない…」

「麻梨菜だったら相談してくれた方が嬉しいよあ？今見たいに」

「…どうしても相談したくない」

「…そこまで由夏が嫌なら仕方ないかなあ…。じゃあ麻梨菜が出来る限り相談に乗ってあげるねえ？また何かあったら相談してねえ」

「うん…ありがとう」

「じゃあまた明日あ」

「じゃあね」

受話器を置いた。

とりあえず、これから何も起こらなければいい。
起こってほしくなんかない。

そう思った。

二日後、また同じ紙が下駄箱に入っていた。
今度も赤い文字で、死ね！と書いてあった。

やはり差出人は不明。

私はそれをびりびりに破き捨てた。
誰にも見られなくなかった。

そしてこの日から一週間この紙は入れられ続けていた。
毎日、死ね！と赤い文字で書かれた紙一枚がずっと私の帰りを待っていた。

毎日入れられていると、もはや入っていることが当たり前になった。
初めは衝撃を受け、傷ついたが紙一枚だけなので私も慣れてしまった。

その上、文化祭を間近に控えていたので日々忙しくなり、紙だけで特に何もされていないこともあり、そのことに構っている余裕がなくなってしまうことも原因である。

そして私はそのまま文化祭当日を迎えることとなった。

この学校の…というこの地域の文化祭と言っても問題ないくらい、文化祭は地域の人たちがやって来る。
なぜかといえば、この地域には娯楽が少ないからである。

店も斑で、もちろん24時間営業の店なんかもあるはずがない。
せいぜい一番長く開いている店で夜十一時までである。

そんなこの地域に文化祭は…特に子供たちにとっては重要な娯楽な

のである。

だから文化祭は必然的に学校側は力が入るし、地域の人も協力を惜しまない。

毎年かなり盛り上がる。

…まあ、かなりと言っても限度はあるが。

というわけで、私は今大忙しでかき氷をかいているのであった。

うちのクラスは先生の提案でかき氷になったのだ。

先生いわく、元手が安くてみんなが買う定番で儲かるらしい。

後は小物も売っている。

なんせ、クラスが少ないものだから、食べ物とそれ以外の物を必ずどのクラスも売らなくてはならないのだ。

小物はシュシュとかゴムとか女の子向けの物が多い。

私も頑張って製作した。

人気も高く、午前中にほとんど売れてしまった。

かき氷の方も用意していた分では足りそうになくなってきたので、午前中に買い足した。

私は午前の店番だったので、この大忙しの場所から解放され、智也と回ることにした。

…もちろん二人で、当番を合わせていたのだ。

店を回るとどこも繁盛していた。

お昼を過ぎ、お腹が空いていたのでお腹に溜まりそうな物を食べることにした。

目についたのがキャベツ焼きだった。

たつぷりのキャベツが美味しそうである。

焼いている人は暑そうだが。

額に汗が浮かんでいるのが見える。

私はそれを気にせず、注文した。

たとえば私が注文せずとも、他の人が注文するだろう。

つまりは、結局はその人はキャベツ焼きを焼き続けなくてはならないのである。

「キャベツ焼き二つ下さい」

キャベツ焼き二つという声がかかり、しばらくするとキャベツ焼き二つが運ばれて来た。

それを受け取り、学校の机にテーブルクロスをかけた場所に移動した。

「美味しい！」

私は一口食べ、そう言い放った。

素人が作ったとは思えないほど美味しかった。

「美味しいな……」

「私もこれくらい作れたらな」

「なかなか無理だと思うぞ。 あいつはお好み焼き屋の息子だからな」

「……忘れてた」

どうりで素人とは思えない美味しさだったわけだ。
すっかりお好み焼き屋の息子だということを失念していた。
この歳でもうボケの始まりだろうか。

「そろそろ行くか？」

「うん」

見事に完食した。

また機会があれば食べたいお味である。

その後は、小物とかを見て回った。

たまにアイスとかを間食した。

あっという間に夕方がやって来、文化祭は終わりをとげた。
楽しい一日だった。

ずっと続いて欲しいくらいだった。

しかしこの日を境に、私の運命は変化を遂げることになる。

*** 傷痕 ***

>br<文化祭が終わり数日が経った頃、私はクラス的女子から何故か陰で笑われたりしていることに気付いた。

文化祭が終わった次の日から、実はその行為は始まっていたのだが、私は全く気付かなかった。

気付いたのは今日。

明らかな悪意を私にはつきりと向けられてからだ。

私の掃除区分は教室のゴミ捨てだ。

ゴミ箱からゴミ袋を取り去ろうとした時、それは起こった。

ドンッ。

一瞬、何をされたかわからなかった。

気がつくとゴミ箱が蹴飛ばされ、一メートル先に飛んでいた。もちろん、ゴミ箱の中身をぶちまけながらである。

ゴミ箱を蹴り飛ばした主は、クラスのリーダー的存在の女子だった。

「ごめんね。足が滑っちゃった」

全然悪く思っていないような声だった。しかも、顔が笑っている。

周りの女子からも笑いが起こる。

はつきり言つて不快だった。
こんなことされる理由も全く思い付かない。

「……」

私は返事を返せなかった。

「じゃあ、みんな行こう」

そんな私を無視し、女子の集団は去っていく。
去っていく時に、ゴミを踏み散らかすこともしっかり忘れずにだ。

そして、この場所には私一人になった。

>br<>br< 静まり返った教室の中、私は一人散らばったゴミ
を拾い集め始めた。

ゴミは踏み散らかされたおかげで、手で拾い集めるのが難しいほど
散乱していた。

私は手で拾うことを諦め、ロッカーから箒とちり取りを取り出した。
床に散らばったゴミを箒でちり取りに集め、再びゴミ箱に返した。
そしてゴミ袋を取り出し、ゴミ捨て場へと向かった。

十月の始めとはいえ、今年はまだ暑さが続いている。
ゴミ捨て場付近は異臭を漂わせていた。

手際よくゴミを捨て、足早にこの場から去った。

教室に戻り、鞆を掴むと私は即座に下駄箱に向かった。

今日は、智也はいつもより部活が遅くなるというので今日は別々に帰ることになっていた。

下駄箱に着き、私は下駄箱を開けた。

…文化祭が終わってから数日ご無沙汰だったあの紙が再び入っていた。

今度も赤い文字で”死ね！”と書いていた。

文化祭前と違うのは、さらに赤い文字で”殺す”と付け加えられていたことだ。

私はそれをぐしゃぐしゃにして丸め、鞆に放り込んだ。

>br<>br<家に帰ると、部屋に飛び込みベットに倒れ込んだ。

私は麻梨菜に相談しようか迷った。

しかし、今はこのことを語る気分ではなかった。

それほどまでに、私には今日のことが衝撃だった。

はつきり言って、かなり傷ついた。

私は鞆からあの紙を取り出し、丸めたそれをそつと開いた。

さつきと変わらず”死ね！”と”殺す”と書かれている。

筆跡からは、誰かは判断できない。

一体誰がこの紙を入れているのだろうか。

やはり、今日悪意を向けてきたあのクラスの女子たちなのだろうか。それとも別の誰かなのか。

考えても答えはでなかった。
いや、出したくなかった。

自分にこのような悪意が向けられたことを認めたくなかった。

しかし、今日されたことを思えば認めざるをえない。

明日、また同じようなことをされるのだろうか。

それとも、もっと酷いことをされるだろうか。

どちらにしても、はっきり言って好ましいことではない。

どちらも嫌である。

明日がすごく憂鬱になった。

>br<>br<次の日、やはり掃除中にそれは起こった。

今度は、箒で足を引っ掛けられた。

明らかに、故意だった。

「ごめんね？大丈夫だった？」

今回もわざとらしく、箒で足を引っ掛けた女子がそう言う。

「…うん」

「そつだよねえ？慣れてるもんね？」

暗に、私の運動神経のなさを言っているのだろう。

「…うん」

「じゃあ、私たちは帰るから後片付けよろしくね？」

「うん…」

私はただ一言をくり返すことしか出来なかった。

私は大人しく言われた通り、箒等をロッカーにしまった。

私は自分の席に行き、机に突っ伏した。

さっき転んだ時に擦りむいた膝の傷が傷む。

同時に心も傷んだ。

何がいけないのだろう。

なんで、こんなことされるのだろう。

ずっと同じ疑問が頭をぐるぐる回り続けた。

>br<>br<それから毎日のように掃除時間の嫌がらせは続いた。

そして智也と帰るこの時間が私の唯一の学校での楽しみになった。授業中や休憩時間とかでもクラスの女子からの視線が気になり、落ち着かないからだ。

この時間だけが、開放感に溢れていて、私の心を癒してくれる。

「最近元気ないよな」

「…そんなことないよ?」

極力、明るく努めようとしていたのだが、やはり上手く出来ていなかったのだろうか。

「…そうか?」

「うん」

沈黙が訪れる。

「…今度どこかに遊びに行こう?」

「いいけど、どこに行く?」

「じゃあ、智也の家がいい」

「まあいいけど…」

「じゃあ、決まり」

こんな些細な約束が、今の私には大きな支えとなった。
その日が、楽しみで仕方なかった。

> b r < > b r < 私は、とうとう麻梨菜に掃除時間の嫌がらせについて相談することに決めた。
一人で心の中に抱え込んでおくことに堪えられなくなった。
少しでも、話を聞いてほしかった。

私は放課後、麻梨菜への教室へ足を運んだ。
今日は、陸上部は休みだということを聞いていたからだ。
それから、人気のない場所に来てもらい、相談を始めた。

「どうして、もっと早く相談してくれなかったのお!？」

私が全て話し終わった後、麻梨菜はそう言った。

「じゅめんね…」

「もっと早く言ってくれれば…」

「じゅめんね…」

私はただ謝ることしか出来なかった。

何か他の言葉を言えば泣いてしまいそうだった。

しかし、麻梨菜のその後の優しい言葉の数々に、結局堪え切れずに泣いてしまった。

その後、麻梨菜は私が落ち着くまでいてくれた。

麻梨菜がいてくれてよかった。
心の底から、そう思う。

智也との部活が終わる時間になったので、麻梨菜とはそこで別れることにした。

智也に心配をかけないためだ。

「じゃあ、また明日あ」

「うん」

私は、小さく手を振ってからその場から去った。

>br<>br<嫌がらせの日々はまだ続いていたが、智也の家に遊びに遊びに行く日がやって来た。

なぜ、私が智也の家に行きたがったのかというと、どこか外に遊びに行くより、クラスの子供たちに確実に会う可能性が少ないというのと、智也が私の家に遊びに来るのは頻繁にあるのだが、私は滅多に智也の家に遊びには行かないからだった。

「お邪魔します…」

私はそう言い、智也の後に続いて玄関の扉をくぐった。
滅多に來ない場所なので、緊張してしまう。

「じゃあ、上がって」

「うん」

私は靴をきちんと揃えて、向きを変えた。
そして、智也の部屋に向かう。

智也の部屋を訪れるのはまだ二回目だ。

智也の家を訪れたのは、さすがに一回だけではないのだが、たいていリビングで過ごしていたので、部屋を訪れるということがあまりなかったのだ。

「適当に座ってくれ」

私は、一瞬どこに座ろうか考え、とりあえず空いている場所に座った。

「
…」

「
…」

沈黙が続いた。

お互いが何も喋らない。

気まずい沈黙が流れ続ける。

何か喋らなくてはと、思えば思うほど、何を喋るべきなのか、わからなくなる。

「読むか？」

最初に沈黙を破ったのは智也だった。

差し出して来たのは、一冊の雑誌。

私は、とりあえずその雑誌を読み始めた。

>br<>br<

智也が差し出して来た雑誌には、お菓子の美味しい店やレシピ、可愛い雑貨等が載っていた。

…確かに、智也は甘い物好きではあるが、雑誌を買うほどまでは好

きではないはずだ。

しかも、こんな可愛い雑貨まで載っている雑誌なんて、なおさらないだろう。

明らかに、女性向け雑誌である。

たぶん、私のために買ってくれたのだろう。

その気遣いが嬉しかった。

雑誌を読み終わり、智也にそれを返すと、智也は何か言いたげな表情をした。

そして、言葉を発した。何かつらいことでもあるんじゃないか、と。

その言葉に私の心の中の何かが限界を迎えようとしていた。

「…何も、な…いよ」

「そんなことないだろう」

「そんなことない…」

私は必死に涙を堪えながら言った。

私の精一杯の強がりと言った。

「…私、今日はもう帰るね」

私は、智也の部屋を去った。

智也はもう何も言わなかった。

>br<>br<

次の日、学校に行くのが今までにないくらい怠かった。

正直、学校になんか行きたくなかった。

ただでさえ虐めがあり、それだけでも学校に行くという行為が憂鬱だったというのに、さらにそれに加え、唯一の楽しみであった智也に会うことさえ、私の気持ちを沈ませる要因になってしまったのだ。学校に行くことを拒絶してしまうのも無理のないことだと思う。

しかし、学校に行かないという選択肢は今の私には許されていない。

親は不審に思うだろうし、一度休んでしまったら私は学校に行けなくなってしまうだろう。

それも、嫌だった。

こういう思いがあり、私は学校への道を重い足取りで進むのだった。教室に入るとすぐに智也を見つけたが、話しかけることが出来なかった。

そしてそのまま、授業が開始してしまった。

授業が終わり休み時間を迎えたのだが、結局また話しかけることが出来ずに授業を迎えた。

そしてまた、その繰り返し。

結局、放課後を迎えることになってしまった。

「由夏」

声の主は智也だった。

私は、伏せていた顔を勢いよく上げ、智也を見た。

「今日は、部活終わるの待ってなくていいから」

その言葉に私は奈落の底に落とされた気分になった。

「じゃあ」

智也は、それだけを言って去ってしまった。

残された私は呆然とするしかなかった。

唯一の楽しみの権利さえも、今日は奪われてしまったのだ。

智也は、やはり昨日のことを怒っているのだろうか。

正直に話すべきだったのだろうか。

後悔だけが、私の胸に残った。

* 刺痕

あれから一週間経った。

智也と私はあの日の次の日は、普通に二人で帰った。

智也は別に、怒っていたわけではなかったようだ。

しかし、あの日から智也は私に二度とあの質問をすることはなかった。

内心、そのことにほっとしている。

何度も尋ねられるといつまでも、隠しておける自信がない。

だが、いつまでも隠しておくのも心が苦しかった。

しかし、それ以上に智也にこのことを知られたくない。

でも、こないだのように話さないことで、智也と気まずい雰囲気になっってしまうのも嫌だ。

私は、どうすればいいのかもわからない。

出口が見えない迷路に迷い込んだような気分だ。

しかも、いじめは良くなるどころか日を追うことにつれて、酷くなっている気がする。

このまま、私はずっと皆に悪意を向けられ続けるのだろうか。

もし、本当に永遠にこのままだったなら私は堪えられない。

早くこんな日常は終わってほしい。

解放されたい。

そんな思いも虚しく、私は今日も悪意の標的になる。

本当に、いつこれには終わりが訪れるのだろうか。

早く終わってほしい。

それが今の私の願いだ。

** 刺痕

「遅くなっちゃったな…」

今日の帰りは私一人だった。

なぜなら、今日は靴を隠されてしまったからだ。

智也には言い訳をして、先に帰ってもらった。

智也に帰ってもらった後、一人で靴を探した。

しかし、なかなか見つからず遅くなってしまった。

辺りはもう真っ暗である。

「公園を通っていいのかな…」

私が普段通っている道には明かりが少ない。

公園がある辺りは明かりが多いとは言わないが、普段私を通っている道よりは確実に多い。

やはり辺りが暗いと怖く、不安だ。

少しでも明るい所を通りたい。

しかし、私はこのことを後悔するようになる。

*** 刺痕

いつもの道から少し外れて、しばらくすると公園が見えてきた。

公園に足を踏み入れると小さな声が聞こえた。

男性のようだ。

よく聞いてみると智也の声に酷似していた。

なんで智也がこんな時間に公園に、という疑問が湧き、私はそつと声のする方を覗いてみた。

そこには、智也と女の子がいた。

私は、目の前の光景が信じられなかった。

いや、信じたくなかったのかもしれない。

智也が、その女の子とキスをしていたのだ。

私は茫然としたまま、気がついたら自分の部屋にいた。

さっき見たことを信じたくなかった。

智也が私じゃない別の女の子とキスをしていたなんて、信じたくない。

相手の女の子は、暗がりによく見えなかった。

つまり、智也の顔もはっきり見えただけじゃない。

これは、私の見間違いではなからうか。

あれは、智也じゃなかったのではないか。

淡い期待が胸の中を過ぎる。

しかし、心の奥底にはあれは智也だという確信めいた思いが渦巻いているのを、私は見ないふりをした。

*** 刺痕

ちっ、ちっ、ちっ。

時計の音が鮮明に聞こえる。

布団に潜り込んでから二時間ほどたった今でも、眠れない。

やはり、さっきのことが気になって眠れないのだ。

見ないふりをしても、見てしまう。

一度心に出来たしこりは、簡単には取れないことを私は今思い知った。

あの子は智也の何なんだろう。

智也は、なんであの子にキスをしたの。

私には一度もしてくれたことなどないのに。

あの子は特別なの。

心の中に負の感情ばかり溜まっていくのが分かった。

頭からこのことを追い出そうとしているのに、うまくいかない。

そう思えば思うほど、余計に考える。

智也のこと。

あの子のこと。

どうして、智也はあの子にキスしたの…。

私の見間違いだったらどんなに幸せだろう。

見間違いであればいい。

結局私は、このことを考え続けてしまい、眠れない夜を明かしたのだ。

***** 刺痕

朝から、私は智也が気になって仕方がなかった。

あのことを聞いて確かめたい。

間違いだって言ってもらいたい。

だが、私は智也に話しかけるタイミングを上手く掴めないでいた。

それに、聞きたいとは思ってはいても、実際にそれを行おうとしても足が竦み、声も出なくなってしまう。

結局、私は事実を知ることには怯えているのだ。

智也の口からあの子とキスしていたことをはっきり告げられてしまうことを、私は恐れているのだ。

この日は、私は結局智也に事実を問うことができなかった。

*****刺痕

私は三日経っても、智也にあのことを聞くことが出来なかった。

そして今日は智也は部活のが終わるのが遅いらしく、帰りは私一人だった。

ぶらぶらしながら、あのことを考えていた。

考えても、解決なんてしないことはわかっている。

だけど、そのことが頭にこびりついて離れないのだ。

家に帰り、気分転換に小説を読むことにした。

気がつくとも随分時間が経っていた。

玄関から、音がする。

どうやら、妹が帰ってきたようだ。

妹は部活に入っており、たまに帰りが遅い時がある。

今日は、その遅い日なのだろう。

妹が帰ってきたので、私は夕食を食べに一階に下りていった。

今日の夕食は、唐揚げだった。

美味しそうな匂いが部屋に立ち込めている。

私は席に着くと、黙々と唐揚げを口に運んだ。

唐揚げの味が口の中に広がり、疲れた心にはなぜかかなり美味しく感じられた。

私は夕食を食べ終えた後は、ベットに突っ伏した。

そのまま目を閉じ、眠りの世界へと旅だった。

*****刺痕

次の日の掃除時間。

いつもにも増してひどい嫌がらせが待ち受けていた。

「じゅめん」

クラスのある女子はにこやかに言った。

ゴミまみれになった私に向かって。

「わざとじゃないんだよ？」

わざとではないという言葉こそが、わざとらしかった。

故意にやらなければ、私はこんな状態になったりしないだろう。

そう、有りつたけの力で突き飛ばし、ごみ箱を投げ付けなければこんな風に私はゴミまみれにはならない。

「きゃあっ」

自分の身に起こったことが一瞬分からなかった。

私は一瞬、茫然となった。

しかし、その後自分のされたことを理解すると、泣きなくなった。

私は全身びしょ濡れになっていた。

雑巾を洗った水で。

今の自分の状態を考えると、涙が溢れそうで私は俯いていた。

「あははっ！見て！きたな〜い」

クラスの女子たちが笑っているのが聞こえる。

ますます、私は顔を上げることが出来ない。

「じゃあ、行こっか」

そう言って、最後にその女子は私に箒を投げ付けた。

「渡里さん、後は片付けといてね〜」

その声を最後に、教室の扉が閉まる音がした。

*****刺痕

私はしばらくその場を動くことが出来なかった。

私の目からは、涙が溢れ出してしまっていた。

あまりにも、この出来事は衝撃的でつらかった。

なぜ私が、こんなことをされなければならないのだろう。

私が一体、彼女たちに何をしたというのだろう。

一人ぼっちの教室で、私は泣き続けた。

「帰ろう…」

しばらく経った後、私は掠れた声で呟いた。

まずは、びしょ濡れになり冷えた体をどうにかしよう。

しかし、今日は体育はなく着替えるものなど持っていない。

どうしようもできない。

しかし、体は冷え切り寒かった。

とりあえず、仕方ないので教室を片付けることにした。

まずは散らかったゴミをゴミ箱に捨て、自分の体にも付いてしまっていたゴミも出来る限り取った。

そのあとは、雑巾で濡れてしまった床を拭いた。

*****刺痕

教室は片付け終わった。

後は、自分を何とかするだけだ。

それが一番困難だった。

とりあえず、服を搾ることにした。

時間が経ち、少しは乾いているとはいえ、夏ではないのだ。

ほとんど乾いておらず、服からは水が滴り落ちていった。

出来る限り服を搾ると、私はため息を零した。

惨めな気分だった。

そして気付けば、もうかなり遅い時間になってしまっている。

私は教室を出ようと扉に手を掛けた時、ガラッと扉が開いた。

私は驚いて、固まってしまった。

教室に入って来たのは、過去に私を二人三脚におとしめた男子、木

下明広だった。

木下君は、私を見た後驚いた声を上げた。

「どうしたの！？渡里さん、濡れてない！？」

そして、自分の学ランを私に貸してくれた。

その行為に一度は止まっていた涙がまた溢れ出してしまった。

第3章 崩壊 *歪み

次の日、私は少し嵩張る紙袋を持ち、学校に投稿した。
その紙袋の中には、昨日借してもらった学ラン。

昨日のことを思い出せば、学校に向かおうとすると鉛のように重たくなる足取りが少しだけ軽くなる。

木下君は、私が支離滅裂に洩らす言葉を嫌がらずに、傍で聞いてくれた。

泣き過ぎで、声が途切れ途切れになってしまふ私の背中を優しくそっと撫でてくれた。

今の私には、それがすごく温かった。

靴箱に行くと、ちょうど木下様君がいた。

私は小走りでそこへ向かった。

「おはよう」

優しい笑みで、木下君は挨拶をくれた。

その笑みにつられて、久しぶりに私も笑顔を溢した。

「おはよう」

それが何となく気恥ずかしく、私は顔が少し赤くなり、俯いた。

「あの…これ。ありがとう…」

私は俯いたまま、紙袋を差し出した。

木下君は紙袋を覗き込み、少しだけ驚いた顔をした。

「わざわざクリーニングに出してくれたんだね。別に良かったのに

…」

「でも…そのまま返すのは悪いから…」

私は借りた学ランをそのまま返すのが忍びなくなって、慌ててクリーニングに出し、クリーニング屋のおばあちゃんに、どうしても今日中に仕上げてくださいと頼み込んだのだ。

「そっか。ありがとう」

木下君は微笑んだ。

「じゃあ、行くね…」

私は、その場から去ろうと背を向けた。
そんな私の腕を木下君は掴んだ。

「え…!？」

私は驚きの声を洩らし、振り返る。
そして、ぶつかる視線。

「どうして？」

質問を投げ掛けてくる木下君。
私には何に対する”どうして”なのか分からなかった。

「な、何？」

「どうして、先に行くの？一緒に行こうよ。同じ教室なんだからさ」

「え…っでも…」

戸惑う私の腕をさらに力を込め、掴む。

「一緒に行こう?」

「迷惑かけるし…」

「そんなこと? そんなこと気にしないでいいよ。だから一緒に行こう」

木下君の勢いに押され、私はこくりと頷いた。
この時頷いたことを、私は数分後には後悔することになるのだけ
れど。

***歪み

他愛のない言葉を交わしながら、私たちは教室に向かった。
しかし、教室に近づくにつれて、私の足は鈍くなる。
足を止めたくなる。

そこを耐え、私は機械的に足を動かす。

ガラッ。

木下君が扉を開ける音がする。

私は俯いて、扉が開く音を聞いた。

突き刺さる視線が向けられるのが、俯いていても感じる。

突き刺さる。

痛い。

逃げたい。

そんな感情が体の中を駆け巡る。
耳に入らなくていい声が侵入して来る。

聞きたくない。

そう思っても、容赦なくこそと囁かれる声は耳を侵す。

塞ぎたい。

しかし、出来ない。

木下君に不審に思われてしまう。

また、心配をかけてしまう。

そう思う私に、さらに聞きたくない言葉が届く。

やっぱり、木下君と一緒に教室に入るんじゃない、なかった。

私のせいで、他の人まで傷つけたくない。

視界が滲む。

そんな俯く私の頭に温かいものが乗せられる。

私は驚いて、顔を上げた。

「え…？」

自然に驚きの声が洩れる。

「気にしなくていいよ」

周りに聞こえないくらいの声で、木下君は囁いた。
私はそれに答えることは出来ずに、また俯いた。

***歪み

その後も、木下君は私を気にしてくれた。

それが、重い。

嬉しいはずなのに。

原因は、嘔き声。

あれさえなければ、私は素直に喜べたのだろう。

心が、鉛のように重い。

早く、解放されたい。

この嘔き声から。

この状況から。

抜け出したい。

この願いはいつ叶うのだろう。

放課後。

それは、私がこの状況から一時逃れられる時間。

しかし、別の問題に囚われる。

グラウンドが視界に入る。

私の視線はある一点に引き寄せられる。

——
智也。

心の奥が、ずきんと痛む。

嫌な記憶が蘇る。

思い出したくない。
傷つきたくない。

結局、あのことは聞けないまま。
私の心には痼が残ったまま。

智也のことは好きなのに、一緒にいれば苦しくなる。
つらくなる。

智也は、以前と変わらない態度。
全然、変わらない。

だけど、苦しい。

私は、地面に腰を下ろした。
土を見つめる。

どうしてなのか。
どうしてこうなってしまったのか。
幸せだった時間が、幸せではないものに変質してしまった。

少し前までは、幸せでいられたのに。

そっと地面の土を掬う。

掌から、さらっと土が零れ落ちた。

まるで、今の私のようなだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6846q/>

セカイの欠片

2011年11月20日20時06分発行